がれき処理ガイドライン

県の最終案を了承

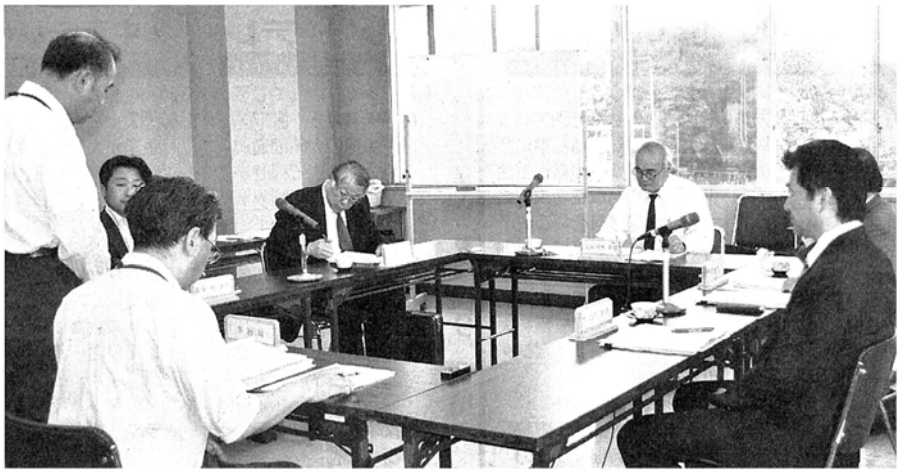
有識者検討委

震災がれきの受け入れに向けたガイドラインを検討する有識者らの委員会が五日、津市栄町一丁目の県合同ビルであり、県が示した最終案を了承した。これを受け、県は七日に策定、発表する見通し。がれきの放射能濃度を一㌔当たり一〇〇㏃、埋め立てる焼却灰を同二〇〇㏃とする目安値について、委員らは安全だとの認識を示した。

検討会は委員長の太田清久・三重大学名誉教授のほか、飯田敏行・大阪大学大学院教授、竹田寛・三重大学医学部付属病院長ら委員四人で構成している。この日は、県が先月末まで実施したパブリックコメントの詳細結果と、市町からの意見内容を説明。その後、ガイドラインの最終案について意見交換した。

目安値については、一般公衆の被ばく限度である年間一㍉シーベルトを超えないように設定されており、「非常に低い値」「かなり安全な数値」といった意見が相次いだ。また、対象とする放射性物質をセシウム134と同137に限っている点も妥当とした。委員からは「一番被ばくするのは作業員。ぜひ線量計の装着を」との助言もあった。

県の報告によると、パブリックコメントの提出は六百二十七件で、提出者は推定二百七十人。提出者の二割弱が県外在住だという。賛否の意思表明があった意見のうち、七割以上が反対だった。（森川静香）



ガイドラインについて話し合った検討委員会＝津市栄町１丁目の県合同ビルで

放射能目安

「十分なぐらい安全」

県議会環境生活農林水産常任委 参考人招致で委員

県議会環境生活農林水産常任委員会（村林聡委員長、九人）は五日開き、東日本大震災で生じた災害廃棄物の広域処理に対応するため、県が独自に策定したガイドライン案が定める受け入れがれきの放射能濃度の目安値について、ガイドラインの作成に携わる県災害廃棄物広域処理検討委員会の委員二人を参考人として招致した。

参考人の飯田教授（後列右端）と牧技師長（後列右から2人目）＝県議会議事堂で

「目安値は十分ぐらい安全」「作業員の安心、安全のため、個人線量計の予算計上を」などの見解が示された。

同検討会の代表としてでなく、専門家の見地から意見を求めた。参考人は、飯田敏行大阪大学大学院工学研究科教授（専門・放射線測定）と、牧浩昭三重大学医学部付属病院中央放射線部診療放射線技師長（同・放射線撮影技術）の二人。

受け入れがれきの放射能濃度の目安値について、国の基準に比べて厳しい一㌔当たり100㏃以下とすることについて、今井智広委員（公明党、二期、津市選出）が国と県との基準の整合性を質問した。飯田教授は「県の目安値は十分ぐらい安全。こんな厳しい基準を設けたら、逆にやりにくくなって大変じゃないかと思う。処理する側と地域住民の安全を考えている」と答えた。

牧技師長は「県の目安値では、全く健康的に問題ない。食べ物からの摂取もいっぱいあり、それと比べても全く高くない。医療現場はそれ以上の線量となっている」と指摘する一方、「作業員の安心、安全のため、バッジ（個人線量計）を身に着けてもらって、きちっとした証拠を残しておいた方がいい。予算的に計上していただきたい」と話した。

平成24年6月6日
伊勢新聞